

中国史に見る人口激減現象について

著者	山田 利明
著者別名	YAMADA Toshiaki
雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究
巻	12
ページ	15-23
発行年	2018-03
URL	http://doi.org/10.34428/00009811



中国史に見る人口激減現象について

山田利明（文学部）

キーワード：中国史、戦乱、飢饉、餓死、人口

中国史の基本的な史料として、各王朝が編纂した正史と称される歴史書がある。この歴史書は、自からの王朝が前王朝を承継ぐ、正統な王朝であることを記すための歴史書で、その王朝公認の史書である。『史記』から始まり『明史』に終る 24 種の歴史書によって構成される。本来はここに清朝の正史が含まれなければならないが、それを公認する王朝が無いため、清朝史は『清史稿』というかたちで完成している。

これらの正史には、皇帝を始めとしてその一族・群臣の将軍・政治家・学者文人から多様な庶人に至るまでの伝記が収められ、さらに地理・官制・軍旅等の多岐に渉る記録が載せられている。それらの記録の中には、各郡県あるいは州の戸数や口数を記録したところがあり、これにもとづいて人口を推定することができる。その際、1 戸の口数（人数）を平均 5 人とする計算法が代表的な方法とされているようである。また、記録される兵員数から推定する方法もあり、例えば『新唐書』食貨志には「通以二戸養一兵」とあるから、唐代では通常 2 戸で 1 人の兵士を負担した。したがって、兵士の総数の 2 倍が戸数とみなされるわけで、そこから口数を推定することも出来る。ただし、全国全戸が兵士の負担をするとは限らないから、当然誤差が生じる。

こうした方法によって各時代の人口数を示した研究書に、1988 年に人民出版社から刊行された趙文林・謝淑君共著の『中国人口史』という書籍がある。また、人口の増減については、自然死の他に疫病や人災・天災の発生がその主要な原因となるから、その方面からの記録も考慮する必要がある。ここでは、佐藤武敏『中国災害史年表』（国書刊行会版）を用いてそれらの災害と人口減の関連を考えた。この書も正史中の記事を摘記して年代順、さらに月順に配列したもので、これもまた本論文にとって極めて有益な 1 書となった。特に、人口の極端な減少については、従来から戦乱を原因とする見方があったが、実は飢餓によるものが多くを占めるという解釈をせざるを得ない状況があることを明らかにする。これらは後文において詳細を論ずることになる。

もう 1 つの成果は、その飢餓の原因であるが、確かに天候の不順にその原因があると思われるが、それを倍加した被害の原因の 1 つに耕地面積の偏狭な状況があったと考えられることである。これについても後文で論ずる。

1

歴史的に中国の耕作状況を見るには、先ずその地理的特徴について知っておく必要がある。周知の

ように中国には、その国土を南北に分けて東に流れる黄河と長江の2大河川があり、大興安嶺山脈から南に続く太行山脈、長江の巫山峡谷を経て雲南山地に至る山塊線が東西を分ける。この東西線の東が平地、西が山地となる。ただし、巫山峡谷の西は四川盆地が開ける。かつての蜀である。蜀に入るには、巫山の断崖に栈道を通しこれをわたった。「蜀道難」とはこれをいう。

この大興安嶺山脈から太行山脈南端を通り西安から藍州あたりまでが黄土の堆積地で、特に黄河が鉤形に曲る内側一体から西にかけて黄土高原と称する。黄土の厚さは100米前後の所が多いが、場所によっては200米以上に及ぶといわれる。

また、長江以南も、浜海地域一帯は、東南丘陵と称される標高500米ほどの丘陵地であり、浙江・福建・広東各州の西部には1,000米級の山岳も存在する。それでも丘陵の間に広がる平地は広大であり、日本の県単位の広がりをもつ。

ところで、中国文明の発生は、黄河中・下流域とされる。歴史的には、夏・殷・周三代の故地は、いずれも黄河流域に存在した。殷・周はともあれ、夏王朝の存在は証明されていないが、夏王朝が存在したとされるA.D.1800年頃の遺跡と考えられている二里頭遺跡が発掘されている。ただし、この遺跡については、異論があり、新石器時代竜山文化期とする説が根強い。いずれにしても、この頃から黄河流域では雑穀類が栽培されており、南の長江沿岸地域に発達する米作文化とは異なった展開をする。その原因は、この地方が雨量の少ない乾燥地帯であったために、水田を必要とする米作は不可能であったからである。さらにいえば、殷周から秦・前漢王朝が存在した地は、黄河の屈曲部であり、表土は薄い黄土に覆われる。つまり、保水性がない。そのため小麦・黍などの雑穀類が農産の主となる。降水量も年間500ミリ以下。東京の降水量が年平均1500ミリであるから、およそその1/3ということになる。これについては、既に灌漑用の井戸の存在が指摘されている。これに対して、長江流域の米作はすでに6000年前に行われていた。もちろんその当時の農法と現代のそれを比べることは、論旨の上から殆ど意味をもたないから措いておく。ただ、南方の米作も北方の雑穀作もほとんど原種に近いものと考えられるから、従って収穫量も多くはない。ところで、殷周から戦国時代を経て漢（前漢・後漢）に至るまでは、いずれも北方王朝であって、そのために史書では北方の文化的優越性が強調されているように思われる。ただし、米作の初期から水田が形成されていたとは思われない。その初期には、陸稲の可能性も考えられるが、池沼のごく浅い水ぎわに自生した水稻を栽培したとも考えられる。いずれにしても、古代インドに発生した稲米が中国南方に伝えられたと考えられている。

現在の米作地帯を概観すると、長江の南北兩岸一帯と特に南岸から南に広がる平野部。これが巫山峡谷にまで続く。さらに、巫山を越えて四川盆地に入れば、中国有数の稲作地帯である。

この長江沿岸の米作は、新石器時代以前から行われていた可能性を示唆する論文が多いが、その起源がどこにあるにせよ、秦・漢の頃にはすでに江南一帯は稲作が行われていた。ただしその耕作面積は、おそらく現代とは比べものにならない程の限られた地域であったと考えてよい。それというのも、水田耕作には大規模な灌漑工事が必要であること、特に水量の管理などを含めると、広大な水田の運営は難しい。しかもその収穫量も現在のそれと比較すると、かなり低いところにあったと考えられる。

これは雑穀を主とした北方でも同様であり、限られた一部の地域に限定されよう。なぜなら、第1に水利・灌漑が不十分であったこと、第2に品種の問題がある。ただし、既に記したように紀元前頃から、井戸を掘って灌漑に用いたとする説もある。作物はいずれも改良前の、あるいは改良途上の原種かそれに近い状態のものが主で、そうなりとおそらく収穫量も現在と比べるとかなり少ないと考えてよい。

紀元前10世紀の殷王朝時代から3世紀の後漢滅亡に至るまで、いずれの王朝も黄河流域にあった。ところが三国鼎立の時代になると、魏は黄河流域にあるものの、呉は長江流域から南に、蜀は四川を中心として独立する。これを食糧上から解釈すれば、それぞれの地が1国を賄うに足る食糧を、供給することが出来るようになっていたと解釈することができる。しかし、それは名目上のことであって、実際にはかなり酷しい現実が存在した。国土が3分されたことは、例えば北方に旱害が起れば、たちまち北方王朝は危急の状況に陥るわけで、その際に他の2国から援助を受けられれば良いが、そうでなければ当然その国は存立の基盤を失う。

冒頭に記した『中国人口史』を見てみると、後漢の靈帝、中平5年(188年)の推定人口は59,780,000人である。ところが三国初期の221年では、14,083,000人となっている。実に33年間で1/4に激減している。この間に3国間での戦乱があったことは史書に詳しいが、国民の3/4が死ぬ戦乱とはどのように解すればよいのか。ところが『中国災害史年表』を見ると、後漢末の194年(興平元年)6月、「三輔大旱す。四月よりこの月に至る。穀石五〇万、豆麦石二〇万、人相い食^{くら}う」とある(『後漢書』献帝紀、同五行志下)。三輔とは、漢都長安を中心とする関中を、武帝の時に3分割して治めた。この地を総称して三輔という。要するに首都一円である。ここの旱害で人肉食が起り、穀類合せて70万石を放出したというのである。同じく197年2月、「天旱して歳^{くら}荒す。江淮の間、民相い食^{くら}う」と(『後漢書』献帝紀。同じく「袁術伝」)。前者は北方台地。後者は現在の南京から徐州にかけての地域か。この間にも197年(興平2年夏)に「蝗あり」、9月に「漢水溢れ民人を害す」、213年(建安18年)には、「大水あり」、翌年は「早あり」、同22年に「大疫あり」と記す。要するに毎年のように飢餓や災害が続き、人が人を食う事態が起っている。つまり、戦乱による死者ではない。まさしく飢餓と災害による死者である。この際に犠牲となるのは子供であり、疫疾の犠牲者も体力のない幼児や高齢者であると考えてよい。

古来、兵戦は秋から冬にかけて行われるのが常であった。これは他の労役も同様で、収穫の終わったいわゆる農閑期をもってする。農繁期にこれを行えば、主たる従事者を欠いた農産は成り立たず、その年の収穫は激減し必ず饑る。しかも農地が戦場となれば、収穫はない。夏から秋にかけての蝗害もしばしば記されるところで、これは毎年に記録がある。こうした被害に対して、朝廷は国倉を開き救恤したが、「人相い食^{くら}う」という記述はその後も表れる。要するに、戦乱と飢餓の相乗作用によって人口は1/4になったと考えてよい。

飢餓や疫疾に際しての犠牲者に幼児が多くなることについては、人口構成上のアンバランスをその後も永く持ち続けることになる。つまり、幼児が壮丁となる15~16歳までの10年間はあまり問題は

ないが、それ以後には壮丁人口が減り、兵卒や労働人口の不足をきたすことになる。しかし、人口が1/4に減るという事態はどういうことか。

三国初期の14,000,000人という人口が、後漢末の59,780,000人を回復するのは、実に604年、隋の煬帝の大業5年に51,396,000人、743年唐の大宝元年の56,475,000人をまたなければならない。521年かかっている。確かにその間にも黄巾の乱を始めとして、後漢末の反乱・動乱は記録されるもの5件あり、それぞれが10万人から100万人の反徒を擁する集団によって起こされる。こうした数は常に誇張されて記されるため、そのまま信じるわけにいかないが、鎮圧軍・反乱軍両方の死者を合わせれば、相当の数にはなろう。しかも累は反徒の家族に及ぶから一家の平均を5人とすれば1人の反徒について4人の犠牲者が出ることになる。しかし、その人口の回復に600年を要したことは、単に戦乱のみをその原因とするわけにはいくまい。

この人口の激減について、あるいは戦乱による流民を原因とする考えもあろう。しかし流民が原因であれば、平和の回復後20年ほど経れば、旧に復することになる。西晋武帝の太康元年(280)の人口が20,896,000人。三国期初期(221)より5,000,000人増えている。60年間に600万人の増加である。その間の人口数を挙げれば242年は16,350,000人、263年には18,853,000人、そして280年の20,890,000人である。20年間毎にほぼ200万人の増加である。

もう少し遡ってみると、後漢明帝の永平18年(75)は34,981,000人、13年後の章帝の章和2年(88)は44,326,000人、さらに和帝の元興元年(105)は54,372,000人。ところが20年後の安帝の延光4年(125)には49,994,000人となって、40万人程が減っている。いま元興元年以降、延光年に至るまでの災害兵乱の状況を見ると、殤帝延平元年(106)6月に「郡国三七大水す」(『後漢書』殤帝紀)とあり、そのために宮中の膳肴を減じ、衣服も減らしたとある。安帝永初元年(107)には18の郡国に地震あり、41郡国に大雨が降り山崩れや大水が出て、そのために、「安帝紀」注には「時に州郡大いに飢え、米二千石を給するも人相い食^{くら}う」とある。翌三年には、「京師大いに飢え、民相い食う」(『安帝紀』)とある。この安帝の治世は自然災害が多く、大雨・旱害・地震・蝗害等が頻発する。

実は人口が激減して、その回復に長時間かかるのは、こうした自然災害の特徴といえるように思う。それは、例えば兵戦での死亡者の多くは兵士として徴発された成年男子である。年齢層として見れば15歳から40歳というところであろう。この世代の男子が少なくなっても、実は生れる子供はそれ程減らない。当時は一夫一婦制が確立していたわけではないからである。女性の人口が減らない限り、男子の人口が一時的に減っても、4・5年たてば16~17歳の男子人口は回復するし、戦死を免れた青壮年も帰農しているから、小児の人口から急激に回復していくと考えてよい。

ところが、飢餓や天災による人口減の場合、最初に死亡していくのは若年層である幼児と老人である。その場合、人口の回復はきわめて緩慢となる。子供が生れ成人するまでの間、ほぼ15~16年間は第2世代の誕生は望めない。その間にさらに飢餓・天災が続けば、回復はなお遅くなる。しかも、成人した子供が兵士として徴集され戦死すれば、その回復は望めない。三国期には、確かに大規模な戦

火が数度にわたってあり、しかもそのために流民も多く発生したものと考えてよいが、流民の発生によって、耕地が放棄されそれによって食糧生産が滞って、結果として人口の半減という事態に至ったのではないか。

『三国志演義』などの小説では、100万単位の軍隊の会戦が描かれるが、実際にはあり得ない。かなり誇張された数である。軍隊として用いる以上、100万人が1ヶ所に駐屯したわけではないが、食料や武器の調達を考えると、100万人分の食料を負担するのは農民であって、一時的にはかなりの不足が民間で発生する。しかも総人口が5,000万人の時代の100万人である。そうした事情を考えると、100万単位の軍団を複数組織することは、不可能と考えてよい。

2

『中国人口史』では、もう1つの激減期が記されている。それは唐の「安史の乱」をはきんで、玄宗の天宝年間におよそ60,000,000人の人口が、徳宗の建中元年には36,150,000になっていることである。確かに、玄宗の末年には、有名な「安史の乱」があつて、国内の混乱は激しかったが、この二つの数字をそのまま読めば、人口がほぼ半減する事態となっている。すなわち、玄宗の天宝14年(755)には、およそ60,503,000人であるが、10年後の代宗の広徳2年(764)には、31,274,000人に半減している。それがさらに徳宗の貞元2年(786)に28,796,000人にまで落ちる。この戦乱が30年以上も続いたとは思われない。そこでこのあたりの状況をもう少し詳しく見ておきたい。

『中国災害史年表』では、肅宗の至徳3年(758)に「歳饑ゆ」(『旧唐書』肅宗紀)とあり、その対策として「酤酒を禁じ、麦の熟する後に常式に任す」という。酤酒とは売り酒。販売用の酒である。この程度のことならば米不足という程度であろうが、翌年(759)は「久しく旱す」とある。ところが、この旱害の影響であろうか、乾元3年(760)「この歳饑え、米一升千五百文に至る」とある。唐制の1升はほぼ0.6ℓ。日本の1升が1.8ℓであるから、そのほぼ1/3になる。これが銅銭(開元通寶)1,500枚。他の物価が判然としないから、比較はできないが、銅貨1,500枚となると、かなりの重さになる。それで日本流にいうと約3合ということになる。これでは家族4～5人の軽い1食というところか。

しかもこの年4月から1ヶ月程雨が降り続き、「米價翔貴(高騰)して、人相い食い、餓死するもの骸を路にさらす」(肅宗紀)という。その2年後(宝応元年=762)の秋には「浙江水旱し、百姓重困す」。水害の後に旱害が起つた。『新唐書』代宗紀に、「州県はすなわち率を科するなく、民の疫死して葬ること能はざるもの、埋るをなす」とある。「率を科す」とは租税の課率である。年貢を課すこともできず、水害の後に疫病が発生し『旧唐書』代宗紀には「江東大疫し、死者半ばを過ぐ」と。長江下流域一帯、罹患者の半分以上が死没したという。一家全滅か働ける者がいないのか、死体を埋葬できないものために県がそれを行ったという。

災厄はさらに続き、広徳2年(764)秋8月、「時に歳は饑荒す」。「蝗は田を食い殆ど尽す」ともある。この蝗害の記録は、その規模を問わなければ、ほぼ毎年の如くあらわれる。しかも北方では安祿

山・史思明の乱（755-763）が発生していた。反乱軍がしばしば暴徒となり府庫や富農を襲うのは、物資の豊富なところを襲ういわば常道と云える。国家の混乱が、こうした災害の被害を倍加させたものといえよう。

被害はこれに停まったわけではなかった。大暦2年の秋には、「河東・河南・淮南・浙江東西・福建等道五十五州、水災を奏す」（『旧唐書』代宗紀）とある。つまり、黄河沿岸より長江の南に至るまでの海濱地域一帯に水害が発生した。その対応は記されていないが、河南より南は米の生産地である。収穫前であるとその歳はほぼ全滅となる。

水災の発生は、確かに異常な降水に原因があるが、その対応として治山治水による水害の防止策もある。ただ一方では反乱に対応しながら、一方では治水工事を起すのは王朝にとって大きな負担となろう。なぜなら、いずれも成人男子を大量に必要とするからである。これだけ広範囲の災害について、『旧唐書』は対策を記していない。唐王朝の疲弊を窺わせるところである。或いはなす術がなかったと云うべきか。

このように見てくると、戦乱の発生による人口減とはいうものの、それは戦死者の増大だけではなく、治山治水策の停滞や耕地の開拓にも支障をきたす。平時に人口が増加するのは当然ではあるが、一旦戦時となると男子は徴集され治水作業も滞る。戦場では男子が死に、故郷では女子が災害の犠牲となる。水害が起れば、必ず農作物に被害が及ぶ。二重・三重のドミノ現象である。中原では、一旦水害が起れば、その平坦な地勢のために被災地は拡大される。戦闘による直接の死者よりも、むしろこうした間接的な死者のほうが多いのかも知れない。

もちろん、当時の人口数の把握が正確ではなかった、という理由も考えられる。しかし戦乱の時代であれば兵士の徴集の必要性から、より正確な戸籍が求められたと考えるべきであろう。もっとも住民と直接対応する地方官の斟酌や見逃しが、無かった訳ではあるまいが、それが人口の半減に結びつくようなことにはなるまい。もしそれが可能であったとすれば、すでに国家や王朝自体が崩壊していることになる。

700年代の後半には、なぜか大雨・旱災・蝗害・冷害などの被害が多出する。しかもこうした食料に関わる災害だけではなく、直接人命に関わる天災も少なくない。例えば寒波。徳宗の貞元元年（785）1月には大風雪が記録される。しかも「民饑え凍死するもの路に倒る」、という。そして春からは旱害が起り8月に至っても雨は降らず、「瀟水・滄水竭き井は皆水なし」と記す。この影響か、2月に「河南河北饑ゆ」（『旧唐書』徳宗紀）とある。この歳7月「関中の蝗、草木を尽す。旱甚しく瀟水まさに竭きんとす。井多く水なし」（徳宗紀）。翌貞元2年1月「民饑ゆ」とあり、その対策として、宮廷は正月の宴を中止し、皇帝の膳を半減した。しかも遂に都に兵乱が起る。ようやくこれを平定するも、すでに国庫は空になる。その危急を救ったのは麦であった。夏麦の収穫を得て食料を得たが「この時、民は久しく饑困し、新麦を食すること過多、死者甚だ多し」（『旧唐書』徳宗紀）。饑餓したものの、ようやく新麦を得てむさぼり食ったのであろう、ために死者多しという。

ところが、この月に京師は大雨に襲われ、溺死者多数。『新唐書』五行志によれば、この時の洪水は

意外に広く、洛陽から河南・淮南に及んだ。黄河より南下して長江附近に達したというのである。翌年も再び同一地域が洪水に襲われている。さらに、貞元4年(788)には大震災があり、2月より3月にかけて被害が拡大された。

これを人口上から見ると、徳宗の建中元年(780)は、36,150,000人であったが、貞元2年(786)では28,795,000人、およそ700万人近い人口が減っている。6年間に700万人が死亡する事態とは、1年間に110万人超が消えていく状況である。兵乱は貞元2年に京師で起こっているが、これは大反乱に至っていない。そうであれば、ほとんどが食料の不足によるものと考えてよい。

このあたりの状況を『資治通鑑』(231巻徳宗・貞元元年)によって見ると、「いま河中の斗米(1斗の米)は五百(銭)、芻藁まさに尽く。墻壁の間に餓殍甚だ衆し」、「時に連年旱蝗あり、度支の資糧は匱竭す」など、人の餓死するのは云うに及ばず、馬料の不足により反徒の平定に兵も馬も出せない饑餓の状況を書いている。さらに先に記したが、「時に此の歳饑饉す。兵民ことどとく皆瘦黒、麦始めて熟すに至り、市に酔人あり。時に当りて嘉瑞となす。人にわかに飽食す。死するもの復た伍の一。数月して人すなわちもとに復す」の記事がある。饑餓の状態から急に満腹にしたためのショックで5人に1人が死んだ。これがどの地方であったのか、明らかにされていないが、ようやく生き残ったものの、饑餓のあまり食物を食いすぎて死んだものが、5人に1人、つまり20%に及んだという。この事例は近代にもあり、酷い饑餓を経たものを飽食させると、必ずショックを起して死亡する。太平洋戦争中の1943年、饑餓の戦場ガダルカナルから救出された兵士に、この現象が見られたという。

3

人口減少上の悪夢のような唐末の時期を経て、北宋の時代になると、人口は徐々に増えてくる。北宋の太祖の開宝3年(970)、人口は29,521,000人であったのが、8年後(978)では33,821,000人。30年後の大中祥符元年(1008)には42,175,000人となる。その後も増え続けて、天禧4年(1020)に50,243,000人、英宗の治平元年(1064)に62,206,000人。1億人を越えるのは光宗の紹熙4年(1193)、101,359,000人である。970年のほぼ3千万人が220年で1億人を超えたわけである。ただしこのあたりがピークであり、10年後からは減少期に入り、恭宗の徳祐元年(1275)には54,748,000人に半減している。僅か80年で半減である。

人口が増えた原因にはいくつかの要因が考えられる。1つは物流の盛行である。宋王朝は、それまで日没から日出まで閉門されていた城市の門を、24時間開門した。これによって、物流は夜間も滞ることなく、物資は城内の市に運ばれた。さらに紙幣の流通である。これは交鈔あるいは交子などと称する1種の手形であったが、後に兌換性をもった紙幣として流通した。これにより遠方との取り引きが可能となり、物資が豊富に出回るようになった。そうすると、商工業が発達し人口も増えることになる。

ところが、北方の金(女真)の侵入によって、王朝は南下して臨安(杭州)に遷る(1131年)。臨安は海に面した良港を持ち、そのために商業活動も活発に行われて、海外貿易も広く行われた。南宋

の支配地は宋朝全盛期のほぼ半分。しかし『中国人口史』では、80,000,000人から90,000,000人台の人口推移である。このあたりの理由はよく分らない。北宋の民人が全て南渡したとは考えられないから、金朝との合算であろうか。

1億人台に増えた光宗の時代以後、人口は下降期に入り、端宗の景炎元年（1276）には半減して54,923,000人である。光宗の紹熙4年からわずか83年しか経ていない。考えられるのは、モンゴル王朝である元の世祖による統一がその3年後であるから、王朝末期の混乱によるか、あるいはモンゴル軍の侵地を除いた人口数であるのか、あるいは流民の発生か。ただし、当時の農業事情からいえば、1億人というのはすでに食糧供給の限界を越えていたのかも知れない。そうであれば、旱害・水害あるいは蝗害による不作があれば、必ず饑饉が引き起されることになる。

商工業の発達とは、農業従事者の減少を指す。必然的に収穫量は減少する。農産技術の向上が無い限り、収穫量を維持することは難しい。ただ、中国の場合、北方は麦作、南方は米作というように画然とした作物の区分が存在した。すでに記したように米が不作でも、夏麦が実れば饑餓は緩和された。ところが北方はしばしば異民族王朝によって支配された。その間の農産物の移動はどうであったのか。これはしかし、北方が不作であった時に、南方の作物が運ばれたのかという問題にも関わる。確かに隋の煬帝の時に完成した南北を結ぶ大運河は、宋代には物流の拠点としての開封に空前の繁栄をもたらせた。海外との貿易を含めて著しく物流が改善されたわけではあるが、広範な饑餓に対する対応については、あまり明らかにされていないようである。

ただ、宋代には確実に人口は増加していて、1億人を越える状況にあった。この人口増は食糧の裏付けなくしては起らない。それには灌漑設備の改良、新田畑の開墾などが広く行われたと見なければならぬ。殊に宋王朝が南渡したために、南方の米作地帯に大きな開発が行われたと見られる。

『中国災害史』を見ると、宋代も元代も毎年のように水害・旱害・蝗害が起り、そのたびに饑餓が発生し、死者が多数出ている。しかしそれでもなお人口は増え続ける。それは災害の被害地が極限化されているからであろう。これに物流の円滑化が加わる。

中国史における人口減少期は、もう1つある。『中国人口史』を見ると、1959年には882,501,000人の人口が、1962年には、684,462,000人になっている。実に2億人の喪失である。これがいわゆる「大躍進運動」の痕跡である。この時、毛沢東の提唱によって近代化のために鉄鋼の増産が図られたが、農民もまたこれに参加し、土炮炉という原始的な製鉄法により、農具から鍋釜までを溶解してこの運動に加わった。ところが出来上がった鉄鉄は不純物が多く、使用に耐えられるものではなかった。また、密植法という農法を提唱して、稲麦の苗を密生させて収穫量の増産を図ったが、これも風が通らずに蒸れて枯死した。あるいはスズメ退治という話も伝えられる。スズメが穀物を荒らすとして、全国的なスズメ退治が行われ、この結果スズメがいなくなったのは良いが、なんと害虫が大発生して穀類を荒らした。この結果、大飢饉が発生して餓死するものが続出した。殊に農村の状況はひどく、田畑に死者の死体を埋めたとも伝えられる。

こうした状況での死亡者の数は、数千万と伝えられたが、4年間で2億人が減っている。つまりこ

の数字が事実とすれば、近代史上有り得べからざる災害と云うべきである。

戦乱や災害による飢饉は、中国だけの問題ではない。ヨーロッパでも起ったし日本でも江戸時代に何回かの記録がある。アフリカでは現代でも民族紛争や革命の混乱にまぎれてこれが起る。ただし現代の地球環境の変化は、従来の局地的変化とは比較にならないほど広範囲な地域の、気候変動を予測させる。要するに全地球的規模の気候変動である。嘗ての食糧不足は、有るところから無いところへの物資の移動によって乗りきれたが、地球全体が無いところになる可能性さえある。

<参考文献>

佐藤武敏『中国災害史年表』国書刊行会、1993年

趙文林・謝淑君『中国人口史』人民出版社、1988年

池橋宏「イネはどこから来たかー水田稲作の起源」『熱帯農業』Vol.47-NO5（2003年）

池橋宏『稲作の起源・イネ学から考古学への挑戦』講談社選書メチエ 2005年